

聞 一 多 著

高唐神女傳説の分析

清華學報第十卷四期 八三七―八六五頁

本論文は文選に收められてゐる漢宋玉の高唐賦―著者によれば、文選の正文の高唐賦とは李善注に引かれた宋玉集とは異同があり、昭明太子刪定以前の面影を傳ふる宋玉集の方が底本とされねばならぬ―を主材料とし、之に楚王との神秘的な交會を歌はれてゐる高唐神女が禹と相似た遭遇をした塗山氏女と同類にして本來は虹霓の化身であり、社神として風雨を支配し、男女の會合を司る高媒たる原始母神に外ならぬことを論證せんとするものである。聞氏はシカゴ藝術學院出身で、中央大學教授、武漢大學文學院々長を経て、胡適の北京大學國學系改組に際し、俞平伯と共に北京大學に迎えられた文學史家である。嘗て文學批評外國文學紹介などの筆を執つたが、本國文學史研究に轉じ、少陵先生年譜會證（文哲季刊第一卷）の著を始めとし、特に湖北蘄水を本貫とする郷土意識からか、最も楚辭研究に力を注ぎ、天問釋天（清華學報九卷）の近作、及び正に發表されんとする楚辭輯補（文哲季刊五卷）の作があつて、本論文も一連に屬する。

支那に於ける原始母神信仰に關しては、我が白鳥清、出石誠彦兩學士の感生傳説を中心とした考察、グラネ、エルケス兩氏の或は誕生儀禮、或は天地剖判の傳説を通

じた研究がある。聞氏は此等の諸論著とは無關係に、郭沫若氏の祖妣考（甲骨文字研究所收）の説を直接の出發點としてゐる。郭氏は仲春の性的禁制解放の季節行事に際し、之を支配する高媒神が性的象徵たることを説く。

聞氏は之に對して此の高媒神が高唐神女と一體であり、本來虹、雲霓の化神で、族祖たる原始母神であると主張するもので、その議論は第一段の高唐神女が虹の化身なりとの考證、第二段の高唐神女が郊社に祭らるゝ母神なりとの推論との二部に分ち得られる。聞氏の最も獨創的な着想と見做すべきは、冒頭詩曹風候人篇を捕え來つてその新解釋により、普通には文獻的に呂氏春秋、宋玉集の如く戰國末期以前に溯らしめ得ざる朝雲の化身なる神女の傳説を古く、晚くとも春秋時代以前の作品たる詩國風に痕跡を見る一段にある。郭氏の郊社が生殖器崇拜とするに對して、虹朝雲の化身なる母神とする論據は茲にある。候人詩の三章の「維鵜在梁。不濡其味。」に就て詩の食魚、漁獲の類例を吟味し、之が暗に魚を指すものであり、「詩」の食が性的満足、「餓」「飢」がその禁斷を現すことから、「彼其之子。不遂其媾」及び卒章の「婉兮嬋兮。季女斯飢。」との詩的聯想の鍵を發見した如き、その

想像奇抜で天外より出づるの慨がある。聞氏は、何故に「食」「餓」が性的なる意味を持つかの理由に就ては別に考へてはゐないが、グラネは既に男女會合に伴ふ共同飲食の習慣に起源を求むるの説がある。聞氏は此の字句論證の後に、候人詩篇が未婚獨身の季女が三百赤苧の候人をして男子を迎へしめた事を歌つたと云ふ新解釋を提唱し塗山氏が禹を迎え婚した傳説と同様な筋を此の詩に於て見んとする。此詩を晋文公が曹共公に賢者僖負羈を用ひざるを責めた故事に結合させて説く序及び毛傳鄭箋の不信は別としても舊解釋には部分的には尙捨て難い長所がある。例へば氏は首章の候人と三百赤苧とを同格と見られるが、傳箋で小人が三百赤苧の大夫以上に榮達したのに、君子は候人の卑官に止るを指すとて對立的に解釋するのは、史記晋世家の美女乗軒者三百人とあるに見ても、今文詩說に系統を引くものであつて、この今文詩說により三百赤苧は、候人に導かれる乗軒美女と解すべきであつて、其點に於て、新解釋には先づ難點がある。更に氏は卒章の季女を單に未婚の女の稱とされるが、召南采蘋に「誰其尸之。有齊季女。」の季女で、漢書地理志にも見えて齊地方の習俗の外に嫁せずして家に止り、降神

を司る巫女たる一家の長女と同じく、巫女に任ずるのではなからうか。而て候人詩は此神に仕へて獨身を守る巫女の境遇を聯想せしめて女子を誘つた求愛の歌と解すべきではなからうか。而して帝の季女にして巫山の臺に住する高唐神女も亦斯の如き巫女であり、楚王との交會が夢中に於ける不思議な出來事として説かれるのは、その神女に對する接觸禁止の強制の存在を考へしめるものであらう。グラネ氏は詩に於ける虹の象徴を論じて、虹は冬籠から解放された仲春の男女の會合の季節に起る爲、本來男女の結合と同時に天地の交會を表す神聖な象徴と考られた。仲春の後には農繁期に入つて男女の季節的離居、接觸の禁止の季節が来る。虹の男女結合を現す神聖なる象徴としての觀念が變化して、寧ろ續いて来る季節の男女接觸の禁止を示すものと觀念さるゝことゝなつたと説いてゐる。(支那古代の祭祀及歌謡附録)グラネの解釋に就ては尙議すべきものがあり、詩に於ける虹の象徴は種々の解釋が可能であるが、候人詩中に直ちに虹の化身なる神女傳説の痕跡を見ることは如何であらうか。以上は氏の所説の根本に對する疑問である。又氏の所論の細部にも一方に於ては高唐神女傳説が曹衛に存在する

ことは楚の勢力範圍であつた故であると證しながら、一方に於ては楚のみならず齊燕の社神も亦高唐神女と一體であると證せられる如き明らかな矛盾もあるが、全體として見るならば、候人詩の新解釋に始り、小學音韻を利用しつゝ輕快なる筆を驅つた古代の神女傳説研究は、頗る清新の氣に溢れて、清華學報誌上に異彩を放つてゐる。

(小川 茂樹)